

教員紹介

今回は、基幹研究院人文科学系准教授 高桑晴子先生をご紹介します。
高桑先生は大学院では比較社会文化学専攻英語圏・仏語圏言語文化学コース、
学部では文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コースにご所属です。



文学を通じた 19世紀アイルランド女性作家との対話 「文学は言葉の力に触れる自分探し」

Takakuwa Haruko
高桑 晴子

Q まず始めにご出身、ご経歴などについて教えてください。

東京都出身、東京育ちです。東京大学文学部から大学院の博士前期課程、後期課程に進学しました。大学院生時代に、アイルランド文学を研究対象にしていたこともあり、アイルランドのトリニティカレッジダブリンに1年間留学し、Master of Philosophyを取得しました。帰国後、東京大学で助手（現在の助教）を勤めたのち、専修大学商学部で教養の英語を7年間教え、昨年本学に着任しました。

Q 先生のご専門は何ですか？

英文学、特に19世紀初頭の英国女性作家の作品を研究対象にしています。イギリス作家のジェーン・オースティンやアイルランド作家のマリア・エッジワースの作品を中心に、時代的背景から考察しています。18世紀から19世紀にかけては、スコットランドがイングランド及びウェールズと連合王国を形成し、そこにアイルランドが併合され、海外では植民地経営が拡大した時代でした。ヨーロッパ文化史でいえば、18世紀末から19世紀末はロマン主義時代でもあり、各国・各地域のナショナリズムが形成されていきます。また、この時代は18世紀の啓蒙主義を経て女性の教育や権利についての関心も高まった時代でもあります。彼女たちの作品には、女性を対象とする家庭小説として扱われますが、そのドメスティックな関心の中にはこのような時代背景に基づくナショナリズムの問題が見え隠れします。私が分析対象にしているマリア・エッジワースは、いわゆる土着のアイルランド人ではなく、

アングロ＝アイリッシュ（イングランド系移民の子孫）ということもあって、この時代の歴史や社会的文脈の影響が色濃く出ているところが特徴ともいえます。

今後は、この時代のイギリス、アイルランド文学を対象に、単に連合王国内のナショナリズムの問題だけでなく、大英帝国の海外領土拡大というより広いアトラスの中でナショナル・アイデンティティと女性の位置づけの問題に分析を加えていきたいと思っています。また、キャンオン（文学史上重要とされる有名なテキスト）を対象にして、学生と一緒に、文学の翻訳（adaptation）の問題も考えていきたいと思っています。英文コースの学生でも、大学に入るまで英語の原著を読んだことがない人も入るので、学生と一緒に原著を読み進めるといった作業もしています。

Q 研究の内容と、なぜそのような研究をするようになったのか、教えてください。また先生の研究対象であるイギリス文学の中で、お薦めの作品はありますか？

純粋に子供の頃から本を読むのが大好きでした。6歳の頃に、イギリスに8カ月住んでいたことがあったのが、この地域の文学に興味をもったルーツかもしれません。読むものも、日本文学も読みましたが、どちらかというところヨーロッパ、特にイギリスの文学に関心がありました。ジェーン・オースティンの作品は、英文学の世界の中でもとても有名です。また風俗喜劇（comedy of manners）と呼ばれる作品で、ラブ・コメディの要素もあって、おかしみのある作風をもった作品です。

中でも読みやすくお薦めの作品は、ジェー

ン・オースティンの『高慢（自負）と偏見（原題：Pride and Prejudice）』です。日本語訳もたくさん出ていて、コメディタッチの作品です。今年授業で扱いましたが、お茶大の1年生にも大変好評でした。マリア・エッジワースの作品では、日本語訳されているものに『ラックレント城』という作品がありますが、楽しむためには少し時代背景などの予備知識があるかと思っています。

Q 本学着任前も含めて、お茶大にはどんなイメージを持っていますか？

以前に非常勤講師として英語の授業を担当していたことがあります。その頃からお茶大での授業は大変楽しいものでした。少人数でアットホームな雰囲気、非常に面倒見のいい大学といった印象です。前任校がマンモス校だったこともあり、学生一人一人の顔の見える大学といった印象があります。また先生方の意識が、学生のほうにしっかり向いている雰囲気もとても新鮮です。

Q お茶大生へ向けてのメッセージをお願いします。

大学時代は、いろいろな事にチャレンジすることを薦めます。また最近の傾向がもしもありませんが、あらかじめいろいろなプランを立てて、計画的に過ごす人が多いように思います。それももちろん素敵なことですが、学生というこの時期は、人生の中でも型破りな行動が許される期間です。真面目になりすぎずに、予定していた計画を実行するだけでなく、ちょっと型破りなチャレンジをして、少しは肩の力を抜いてモラトリアムを楽しむといった意識をもってもよいのではないかと思います。

文責：基幹研究院人文科学系准教授 水村 真由美